

基調講演

甲府城の幻の天守

広島大学大学院文学研究科
教授 三浦 正幸

1 はじめに～甲府城天守閣の復元図

甲府城の天守閣が復元できるのかどうかについては以前から考えていまして、今回の資料として甲府城の天守閣の復元図（資料 P9）を作成しました。梁まで一本ずつ細かく書き込んであり、非常に立派な天守閣が建っていたことが分かります。400年前に消滅した天守閣の姿がどうしてこんなに詳しく分かるのか、というのが今回のテーマです。

甲府城には今、天守閣の台座、つまり天守台だけが残っています（資料 P1）。甲府城の図面につきましては山梨県が作成した実測図がありますが、正確な天守台のみの実測図はないということでした。このような天下の名城の天守台なのに、精密な図面がこれくらいしかないということで大変驚いた次第ですが、この実測図によって、この天守台の上に驚くべき天守閣が建っていたことが分かるわけです。

少し前までは、甲府城は古めかしい石垣の天守台はあるけれども、本当にその上に天守閣が建っていたかについては研究者の間でも賛否両論がありました。台座だけ造って上の天守閣はなかったのではないかというのが通説であったと思います。その後、この天守台の下から天守のてっぺんに使う鯨瓦の破片が出土しました。帝京大学の萩原三雄先生を委員長として私も参加しました委員会（甲府城跡保存活用等調査検討委員会）の成果として、鯨瓦の破片からその鯨銚を復元すると、とんでもなく大きな鯨（推定 132 cm）だと分かりました。従って、これは天守閣の屋根を飾っていた鯨だと断定でき、天守閣が建っていたことは歴史的に明らかです。今のところはそこまでだったのですが、では、どのような天守閣が建っていたのか、今回の復元図（資料 P9）がどのような過程でできたのかを説明し、甲府城の天守閣の特徴と価値を知っていただこうと思います。おそらく、多くの人が考えているよりも、甲府城の天守閣の価値ははるかに高いものであると私は思います。



2 消えた天守閣

まず、甲府城の天守閣の話をする前に、前置きをしておかなければいけません。この天守閣はいつ建ったのかということです。石垣が大変に古いもので、その石垣の形、形式から考えると、今から412年前の西暦1600年、慶長5年に関ヶ原の戦いがありましたが、それよりも古い時代に築かれた天守台であるということは間違いなく分かっています。関ヶ原の戦い（以降、関ヶ原）の前の天守台とすると、誰が造ったかということになりますが、これも歴史的事実から考えると、豊臣秀吉の親戚筋であった浅野長政、そしてその息子・幸長の親子によって建てられた天守閣です。造られた石垣がその時期のものなので天守閣は当然その時代のものになると思いますが、要するに関ヶ原の前の豊臣政権下における浅野氏によって建てられた天守閣であろうということまでは、誰が考えても推定できるわけです。

関ヶ原の後、浅野氏は徳川家康側についたので多大なる功績を認められ、紀伊和歌山藩の城主に栄転しました。その後は甲府というところは徳川幕府の直轄地、もしくは幕府の譜代大名の城として明治維新まで存続するわけです。従って徳川幕府の持ち城となった関ヶ原以降、しかも17世紀の前半くらいまでに天守閣が消滅したことになります。つまり、関ヶ原以前に浅野氏が建てた天守閣は、築50年以内にこの世から消えてしまったということが分かります。

天守閣というのはどのくらいの耐用年数があると思いますか？ 今から400年前に建てた姫路城の天守閣は、国宝であり世界遺産であり、現在修理中で、今でもしっかり建っています。天守閣の耐用年数は150年から200年くらいですが、これは修理が必要な年限という意味です。100年から150年くらい経ちますと傷みが来ますから、屋根の吹き替え工事を含めて修理がされます。修理をするとまた元に戻りますので、それを繰り返すと半永久的にもつということで、国宝の姫路城の天守閣は400年経っても残っているわけですし、日本国中の天守閣は古いものは皆、築400年経っても残っています。それにも関わらず甲府城の天守閣が50年以内に消えてしまったのは極めて不思議なことなのですが、実は、関ヶ原の前に豊臣政権下の大名が建てた天守閣というのは、関ヶ原直後にかなりのものが消えてなくなっていることが分かってきました。

消えた天守閣の一覧表（資料P1）をみると、豊臣大坂城から始まり、著名な城がずらりと並んでいます。宇和島城（再建前）までが関ヶ原以前で、彦根城から高知城（再建）までが関ヶ原より後の天守閣です。もちろん甲府城は関ヶ原の前です。豊臣大坂城は大坂夏の陣で焼け落ちたので、これはなくなった理由が分かります。岡山城と広島城は残っていたのですが、太平洋戦争の空襲でなくなってしまいました。大和郡山城にも天守閣はあったのですが、関ヶ原の後、大和郡山から京都の二条城に移築され、そこから淀城に移築され、明治維新まで残って、取り壊されました。大津城は関ヶ原の後に彦根城に移築されま

した。浜松城も天守閣が建っていたのですが、関ヶ原直後くらいになってなくなっています。岡崎城も豊臣政権下の天守閣があったのですが、関ヶ原の後になくなり、元和の初めの頃（1616～1617年くらい）に再建されたものが明治維新まで残っています。つまり岡崎城の天守閣は築20～30年で取り壊されて新築されたことになります。犬山城の天守閣に関しても、1階と2階部分は古い所が残っていますが、その上の部分は17世紀の初めに造りかえられて、現存しています。松本城の乾小天守は今、残っています。宇和島城の天守閣、これは藤堂高虎が造った非常に有名な天守閣だったのですが、築50年で老朽化により取り壊され、その後に建て直した新築したものが残り、現在、重要文化財になっています。

3 反徳川の象徴

ずいぶんたくさんの天守閣がなくなっていることが分かると思います。実はこのほかにもたくさんの天守閣がなくなっていて、豊臣政権下の天守閣で関ヶ原直後になくなった天守閣は全国で十数城以上が確認されます。

なぜ豊臣政権下の天守閣が関ヶ原の後、早いもので築20年、遅いものでも築50年で取り壊されているのか。これについては実は納得できるような理由は分かっていませんが、推定はできます。一つは、そもそも甲府城をはじめとして、山梨県と静岡県、愛知県、それから福島県にある会津若松城も含め、天守閣があった城の位置をよく確認すると分かるように、関東を取り囲んでいます。関東というのは、徳川家康が豊臣秀吉によって押し込められたところですが、天正18年（1590年）に秀吉が家康を関東に押し込んで、その家康の周りに豊臣政権の大名たちをずらっと配置して、しかもその大名たちに豊臣式の天守閣と石垣を持った城を大々的に造らせたのです。その一つが福島県の会津若松城です。この天守閣も江戸の初めに消滅していて、その後建て直したものが幕末まで残っています。そして甲府城の浅野氏。静岡県はひどいもので、駿府城、掛川城、浜松城と主要な城は全部、豊臣政権下の城でした。また愛知県の岡崎城、それから豊橋にあった吉田城、これらはすべて豊臣政権の大名がずらっと並び、徳川家康が京都のほうに一切出て来られないように、今の言葉で言うと牽制をしたわけです。

それらの城というのは、徳川家康が関東、つまり江戸に押し込められた後に豊臣の技術で造られたので、その時初めて石垣と天守閣が建てられたのです。だから石垣と天守閣というのは豊臣政権下の築城技術によるものであり、当時の徳川家においては石垣と天守閣を造る技術というのはありませんでした。だから石垣と天守閣というのは豊臣の城の象徴であって、反徳川になるわけです。ところが関ヶ原の後になると、家康を包囲していた大名は基本的にはことごとく徳川方についたもので、関ヶ原の勝ち組になりました。関ヶ原で勝ち組になった大名たちは大出世して栄転し、すべて西日本へ行ってしまったのです。彼らは西日本へ行って、豊臣の技術で高い石垣と壮大な天守閣の城を片っ端から造りました。

従って、中国、四国、九州地方に石垣があって天守閣がある立派な城が並んでいるのは、要するに甲府をはじめ関東を取り囲んでいた豊臣政権の大名たちが栄転をしていった先の城なのです。

そう考えてみると、その少し前、家康を関東に押し込めるために周りを取り巻いていた城というのは、家康からしてみればとても我慢ならない城、特に天守閣というのは豊臣政権が徳川家を押し込めて牽制していた象徴なので、許しがたい存在だった可能性はあります。従って、家康がそういった天守閣について、積極的に修理して残そうなんていう考えはまったくなかった可能性があるのです。そういった意味で、なくなってしまったというのが一つの推定です。ただし、これだけでは説明できないところがあります。

もう一つ説明できそうなのが宇和島城天守閣の話です。これは愛媛県にある藤堂高虎の天守閣で、1600年ごろに造られた天守閣ですが、築50年後の1650年ごろには腐朽破損してしまって、建て直そうという状態になりました。たった50年で天守閣が腐り果てるということは考えられないのですが、大変に傷んでいました。その時の調査記録が残っています。それを見ると3分の1の柱は、根接ぎといって途中で接いだ柱だということが分かりました。さらに3分の1の柱は完全に腐っていることが分かりました。それから考えると宇和島城の天守閣は新品の材木で造ったのではなく、古材木を寄せ集めて建てていたことが推定されます。天守閣を建てるために古材を集めるとしたら、その地域の大家に対して反抗した勢力が持っていた建物、例えばお寺の本堂、前の領主の建物、そういった古材を集めて再利用して建てたために、耐用年限が短かったのではないかと思います。つまり、古材を利用したこと、反徳川だったために徳川政権による修理工事の命令が出なかったこと、この2つの理由で、関ヶ原以前の天守閣は早くからなくなってしまった可能性が高く、この時期のたくさんの天守閣がなくなった説明ができるわけです。

4 歪んだ台座

では、甲府城の天守閣はどんなものだったかを考えてみたいと思います。甲府城の実測図（資料 P1）を見ると、天守台は大変歪んでいます。ふつうは四角形、長方形に造るのですが、角が直角ではありません。四隅を見ると、90度ではなく、それより広い鈍角、狭い鋭角になっています。四隅が90度でないのは、関ヶ原以前の石垣の築造技術が低いせいです。下の方で直角に造ろうと努力をしても上の方にいくとだんだん歪んでしまうというのがまず一つ。もう一つはそもそも甲府城をご覧になると分かるように、あれは山です。山の上に城を築く時にはもともと地面が不規則なので、それを削って、削った表面に石垣を張り付けて城を造ります。山というのは四角いものはありません。だいたい丸いような形です。それを削るとだいたい不等辺多角形になってしまうのです。四角に削ると削る所が多くなります。最小限度で削ると角は直角ではなく鈍角になってしまう例もあります。従

って甲府城の天守台の角が鈍角、もしくは鋭角で、90度のところがほとんどないのは、石垣の築造技術がまだ低かったことと、もう一つは当時の城の造り方が、四角く整地するものではなくて、大まかに削って不等辺多角形で構わないという方針だった、という2点から、歪んだ天守台になったことが分かります。

日本で今残っている天守台で、歪んでいるものを数えてみると、一番歪んでいるのは織田信長の安土城の天守台です。これは不等辺八角形でした。その次に歪んでいるのは空襲で焼けた岡山城の天守台です。これは不等辺五角形でしかも直角は1カ所だけという滅茶苦茶な格好をしていました。その次に歪んでいるのが実はこの甲府城です。甲府の次に歪んでいるのが、甲府城と同じ時期に造られた静岡県浜松城です。

そうすると、天守台の石垣が歪んでいる城、最も歪んでいる城を4つ挙げると言われたら、安土、岡山、甲府、浜松なので、3番目が甲府だと考えると、日本城郭史上、天守閣の台座の歪みベスト3…ベストなのかワーストなのか分かりませんが、とにかく3番手以内です。ただワーストと言いたくないのは、日本の天守閣の始まりとなった織田信長の安土の天守台が歪みの筆頭だという点です。天守台が歪んでいることは逆に言えばとても古い天守閣であり、抜群な古さを誇った天守台であると言え、城の歴史上きわめて重要なのです。だから歪んでいることは決して恥ずかしいことではなく、日本全国に自慢できます。実は、城の歴史を語る上で忘れることがない三大名城であると言えるのです。

甲府城の天守台について今回、寸法を測りました。本当は現地で巻尺を使って測るのがよいのですが、今回時間がなかったので図面（資料P1）に基づいて測りました。すると右側の辺、つまり東側が22mありました。当時の尺度で考えると、安土城とか大坂城、尾張名古屋、江戸城といった天下人の天守は一間が7尺（2.1m）でした。その他の天守は6尺5寸（1.97m）を一間で造っています。だから一般的に天守は一間が約2mできていると思って結構なので、この22mを昔の尺度で考えて6尺5寸＝1間で割ると、東側の辺は22m＝11間となります。

今度は南側の辺です。南側は随分傾いていますが、この傾いたところをそのまま測ると17m＝8間半です。これは傾いたまま測るのは少しおかしいので、先ほど言った長手の方向、22m＝11間に対して直角方向に測ってみると16m＝8間になります。従って甲府城の天守台は長い方の辺が11間、短い方が8間という規模になります。長い方から短い方を引

き算すると11－8なので差が3間になります。だいたい天守閣の台座は長い方から短い方を引くと2間が相場なので、3間以上は結構細長いと思って結構です。一番短い東側の辺で22m＝11間と測ったのですが、これを西側の辺で測るともっと長くなるので、本当は3間より長くなるかもしれませんが、それでも3間の差がありますからこの天守閣はやたらと縦に細長いということが分かります。特徴としては日本三傑の歪み、そしてかなり細長



い。もちろんこの細長い天守閣というのは古めかしいという意味もあります。

5 関ヶ原以前の石垣

天守閣の復元と直接関係ありませんが、甲府城の石垣について申し上げますと、天守台とその周りにある腰曲輪等に残っている古い時代の石垣ですが、これらは関ヶ原の前の石垣です。山梨県内の皆さんは甲府城の石垣をいつも見ているありがたみを感じないかもしれません。日本全国を見てみると、関ヶ原以前の城で石垣が一番多く残っているのは佐賀県にある肥前名護屋城です。これは豊臣秀吉が朝鮮出兵の時に造った軍事基地で、天下普請で日本中の大名を動員したので非常に巨大です。その後廃城になりましたがそのまま残っています。それから岡山城。これは豊臣秀吉が非常にかわいがった宇喜多秀家が造った城で、秀吉直伝の石垣がありますが、本丸の東半分だけで、西半分は後世に造り直しています。それから豊臣五大老となった毛利元就の広島城の本丸には、石垣がたくさん残っています。

全国的に、関ヶ原以前の石垣が少しだけ残っている城はたくさんありますが、甲府城並みにたくさん残っているのは甲府城を含めてこれらの4城だけです。肥前名護屋城、岡山城、広島城、そして甲府城、それだけしかないのです。熊本城にも一部残っていますが、その量は少なく、ほとんどが関ヶ原後のものです。日本中にたくさんの城がありますが、残っている石垣は、ほとんど全部が関ヶ原後の築城ブームで一斉に造ったものです。だから関ヶ原以前の石垣は数が少ない。そう考えると、甲府城は関ヶ原以前の石垣が大規模に残る「日本四大名城」の一つと言えます。それだけ価値のある城だということをまず分かってほしいと思います。

もう一度天守閣の話に戻ります。甲府城の天守閣の台座はやたらと歪んでいて、かなり細長い。次はもう一つの特徴です。この天守台の11間×8間というのは、実は関ヶ原以前のものとしてはとんでもなく大きな城だったということが分かるのです。当時としては超巨大天守だったのです。関ヶ原以後の天守閣は、全国的な築城ラッシュで造られ、天守閣の大きさがどんどん拡大し、大きい天守閣がたくさんできました。ところが逆に、関ヶ原以前の天守は極めて小さいのです。

天守閣の一覧表(資料 P1)を見てみます。四辺のうち長い辺を「平」、短い辺を「妻」と言いまして、甲府城は南北が「平」、東西が「妻」となります。大きさは「間」です。ただし先ほど言ったように、豊臣大坂城は天下人の天守ですから一間が7尺間(2.1m)、そのほかは6尺5寸間(1.95m)、松本城乾小天守は田舎造りなので一間が6尺間(1.8m)と10cm単位で違いますが、大体6尺5寸間、約2mと考えてください。この「平」と「妻」を掛け算すると、縦×横で天守閣の床面積になります。天守閣は天守台の面積で計算するとだいたい大きさが分かります。

例えば大坂城は、7尺間であることは無視して12間×11間で132となり、130坪以上。次に岡山城と広島城ですが、岡山城は豊臣五大老で禄高が50万石以上あった宇喜多秀家の城で13間×8間、広島城も豊臣五大老である112万石の毛利輝元の城で12間×9間。これらは6尺5寸間ですから甲府城と同じですが、いずれも約100坪です。ということは豊臣五大老、50万石～100万石という大城主の城の天守台は100坪くらいです。

次に大和郡山城です。これは羽柴秀長、秀保すなわち豊臣秀吉の弟の一族です。とても信任されていた秀吉の弟の城が8間×7間のたった56坪で、五大老の城の半分しかありません。五大老の城は秀吉の大坂城と比べて7割減くらいですが、弟の大和郡山城は随分小さいです。次に大津城ですが、これは彦根城に移築されているので、妻側6間としか分かっておらず、平側の長さは不明です。城主の京極高次は、近江守護家の子孫でしたから、滋賀県の支配者の子孫として非常に重要な家でしたが、大きさが分かりません。

甲府城は11間×8間で掛け算すると88坪。ただし、天守閣の台座が歪んでいるので実質的には95坪か96坪になります。要するに五大老の城に近い大きさです。

次に浜松城です。城主は堀尾吉晴で、豊臣政権下では秀吉の直臣として非常に重要な武将でした。その浜松城が8間×6間で48坪。甲府城と比べると3分の2しかありません。それから岡崎城。城主は田中吉政で、これも豊臣政権下の重要な大名ですが、これが7間×7間で49坪です。犬山城は豊臣政権下で城主がころころ変わったので誰が造ったのか分かりませんが、8間半×8間ですから60～70坪くらいです。また、松本城の乾小天守は、石川数正という徳川家康を裏切って豊臣政権下に走った大名が造った天守です。その後、大天守が建て加えられたので、今では小天守にされてしまっていますが、この小天守がかつての天守閣です。これに至っては5間×4間でたった20坪しかないのです。宇和島城天守閣は、家康の信任を買った藤堂高虎の城ですが6間×6間で36坪。宇和島城天守でも、甲府城天守の半分以下ということが分かると思います。

ほかに甲府城よりも大きな天守閣であることが分かっていたのは、織田信長の安土城、福島県にある会津若松城、それから秀吉が造った伏見城、これらは明らかに大きいです。

6 四重五階建て

そうすると甲府城より台座が大きかった天守閣で、関ヶ原前に建っていたのはたった6城しかなかったということが分かります。6城のうち、豊臣の大坂城と伏見城は秀吉の直轄の城です。広島城、岡山城は豊臣五大老です。会津若松城は秀吉が重用した蒲生氏郷が造った大天守です。ということは、天下のそうそうたる人たちが造った城6城だけが甲府城よりも大きいのですから、甲府城は関ヶ原以前の段階では日本全国で7番目の大きさを持っていたということが分かります。ただし、安土城天守閣は焼けてなくなっていますから、実際的には第6位のとんでもない名城です。それくらい素晴らしい天守閣だったとい

うことが分かります。

規模が大きいことは分かったので、今度はその天守閣の縦方向の高さがどのくらいあったのかという話です。これは割と簡単に推定できます。天守閣の一覧表（資料 P1）にある「重」という数字は、屋根の数です。屋根の重数を見ると大坂城、岡山城、広島城、大和郡山城、これが「五」で五重天守です。五重天守というのは豊臣秀吉の城と豊臣五大老の城、つまり豊臣政権下の特権階級の城であって、そのほかに五重天守はありませんでした。関ヶ原後の五重の城を見てみると、萩城があります。これは毛利輝元です。毛利は戦いで敗れても格式だけは高かったので、36万石でも長門と周防の太守ということで、五重です。また姫路城、これは池田輝政ですが、これは一族合わせて100万石くらいの領地を持っていた時に造った天守ですので、やはり五重です。それから熊本城。これは加藤清正ですが、関ヶ原で大抜擢され、熊本城50万石の領主になってから造った天守閣なので五重です。また、金の鯨鉾で有名な尾張名古屋城の天守閣や徳川幕府の中核となった江戸城天守閣、これらは五重です。ということは、五重天守というのは天下人と天下人の次に来るくらいのトップクラスの城だけになるわけです。

そうすると甲府城の場合、大きさはやたらと大きいけれど、豊臣政権下で五大老の次と考えると五重である可能性はほとんどないのです。他の城を見てみると、分かっているものでは関ヶ原以前の城で、三重というのがたくさん並んでいます。この中で大津城の天守閣が三重または四重で中の階数が5階建てであったというのがはっきりと分かります。大津城は近江の守護家の城なので格式としては高いことになるので、甲府城天守閣はさすがに五重では分不相応となります。かといって他の天守閣のように三重であるわけでもありません。天守閣の床面積が五大老に近いくらいの大きさがあることを考えてみると、甲府城の屋根の重数は絶対に四重あったはずなのです。しかも、三重の天守閣で復元すると天守閣の台座が大きすぎるので、図を書いて見ると分かるのですが、天守閣としての形を成し得ないものしか設計できません。ということは、当時の大名家の格式と造形的な面から考えて間違いなく四重の天守閣だったということが分かります。中の階数については四重だったなら4階以上なので、4階か5階のどちらかになります。これは断定できなかったのですが、今回示した資料の図面（資料 P9）は、とりあえず低めの4階で作成しました。

しかし、出来上がった図面の正面平側を見ると、少し上の方が狭苦しい感じがします。だから造形的に見た時にはもう少し高さを高くしないと成り立ちません。従って、今回の図面は四重4階になっていますが、どうも正しくは四重5階だったのではないかと思っています。もう1階高くなって、上の方の中心部分がもう少し高いです。1階分高くなると中が5階建てになりますが、そういう天守だっただろうと思います。すると、甲府城天守閣は外側の屋根の数は四重、中の階数は5階建て、地下1階、合わせて6階建ての天守であったとほぼ断定ができるわけです。とんでもない大きさの天守だったということになります。

7 望楼型天守

次にどんな格好の天守閣だったかが大事です。資料（資料 P2）にある「望楼（ぼうろう）型天守」というのは、古い時代の天守閣です。関ヶ原以前は全部望楼型なので、甲府城の天守閣は年代的に考えると間違いなく望楼型天守の一つになります。それから「層塔（そうとう）型天守」は新しいタイプ、新型の天守です。資料（資料 P3）に「丹波亀山城天守」がありますが、これは藤堂高虎が造った最新型天守で、移築が慶長 15 年で、実際は慶長 9 年～13 年に建った今治城天守が元になっています。これが日本で最初の層塔型の天守ですから、早くみても慶長 9 年（1604）年よりも前には層塔型の天守はありませんでした。甲府の天守閣は間違いなく関ヶ原以前なので、層塔型ではなく望楼型だったということになります。

層塔型と望楼型はどこが違うのかを見てみます。天守閣には三角形の破風（はふ）という屋根の飾りがたくさんついていて、入母屋破風と千鳥破風に分けることができます。入母屋破風というのは、入母屋という屋根の端が破風になっています。千鳥破風は屋根を斜めに下って、屋根の上に三角形の飾りをつけただけです。だから入母屋破風は屋根の端部そのものであり、千鳥破風は屋根を造ってから後で乗せたものなので、根本的に違うものです。この 2 つの破風で区別がつかます。

例えば広島城天守の実測図（資料 P2）をみると、これは原爆で倒壊する前の実測ですが、五重 5 階、慶長 3 年（1598 年）に竣工したものと思われます。毛利輝元の城で、おそらく甲府城天守閣はほぼこれと同じ時期に完成しているので、兄弟分の天守になると思いますが、入母屋破風が乗っている屋根の上に、3 階建ての望楼が乗っています。要するに入母屋造りの屋根の上に望楼というものを乗せたのが望楼型です。これが古い天守の造り方で、織田信長の安土城天守以来、ずっとこの形でできていました。もちろん秀吉の大坂城もこの形です。今残っているものでは姫路城天守（資料 P2）がそうです。これを見ると、天守閣の 3 階部分のところにもものすごく大きな入母屋破風が付いています。このように下の方に大きな入母屋破風が付いた屋根があつて、その屋根の上に望楼が乗っているというものが望楼型天守です。

次に層塔型ですが、丹波亀山城、津山城があります（資料 P3）。下の方に破風はありません。これはお寺にある五重の塔、三重の塔を太く短く造ってあるものです。お寺にある五重の塔、三重の塔のことを層塔と言うので、層塔型と名前が付いています。すなわちお寺の五重の塔型という意味の天守閣です。1 階ごとに順番に小さくして造るとこれになります。それだけだと殺風景なので後から破風を付けるのですが、それは全て千鳥破風です。尾張名古屋城と江戸城天守閣も、三角形の屋根が下のほうにたくさん付いていますが、それは全部千鳥破風であつて、入母屋破風はありません。従って入母屋造りが全くなく、順番に縮んでいっているだけのものが層塔型ということになります。

甲府城天守は時代的な意味から層塔型ではなく、望楼型であったということを100%断言できます。

そのために、望楼型と層塔型の天守閣にどのような特性があるかを説明します（資料 P4）。まず細長い天守台の上に天守閣を建てたらどうなるか。望楼型の場合は、細長い天守台であると1階、2階が細長くなりますが、その上に四角い望楼を乗せるので、上の方は綺麗なすっきりした形に収まります。層塔型の場合は下が細長いと上までずっと細長くどんどん細長さが強調されるので、最上階がうなぎの寝床になってしまっていて、天守閣にはなりません。ということは、甲府城の天守台は細長いので、層塔型では建てられないということが分かります。また台形に歪んだ天守台に建てた場合ですが、望楼型の場合は下の入母屋の屋根が歪んでいるので、下の階は歪んだ状態で建ちますが、屋根の上に望楼を乗せるので、やはり最上階は綺麗な正方形に納めることができます。それに対して層塔型は下が歪んでいると上が歪みっぱなしになるので、最上階まで歪んでしまっていて形になりません。これから考えても、日本で一番歪んでいる天守台の一つで、やたらと細長い甲府城天守閣は、間違いなく望楼型天守であると言えます。これは年代だけでなく学術的に当たり前の話になります。

8 真つ暗闇の階

次に豊臣大坂城天守閣です（資料 P5）。いろいろな復元案がありますが、大坂城図屏風という屏風があり、秀吉の大坂城の姿を唯一正しく描いていますので、その屏風によって復元された天守の図を見てみます。大坂城は望楼型天守ですので、妻側から見ると、ど真ん中に大きな望楼型の入母屋破風があります。それを「A」とします。それから平側から見ると、3階の上の屋根にまた大きな入母屋破風が付いています。この入母屋破風は望楼型の入母屋破風とは関係ないのですが、「A」の破風に対して棟を直交させて乗っています。この入母屋破風を「C」とします。

さらに最上階を見ると、一番てっぺんに最上重・入母屋破風があります。これを「D」とします。古い時代の天守閣は平側、つまり長手方向に対して最上階はそれとは直交する方向に入母屋の屋根を乗せています。だから「D」というのは必ず平側に対して正面を見せています。層塔型の時代になると、これはそうではなくなってしまいます。望楼型の場合だけ長手の平側に対して一番上がこっちを向くという、これが豊臣大坂城の特性だということが分かります。

次に空襲で焼け落ちた岡山城天守閣の実測図（資料 P6～7）です。慶長2年（1597年）に完成した豊臣五大老・宇喜多秀家が造った天守閣で、秀吉にとってもかわいがられたので、この天守閣の建造に対しては豊臣の大工が派遣されて造っている可能性が非常に高いです。

この岡山城天守を見ると、これは五重天守です。南北からの断面図（資料 P6）で階数を

見ると中が6階建てです。だから屋根が五重で内部が6階です。なぜ中の階数が多いかというと、ちょうど望楼型の入母屋破風が付くところの3階部分が大きな屋根の中にすっぽり入りこんでしまうのです。東西の断面図（資料 P7）で3階の部分を確認すると、屋根の中です。北立面図（資料 P7）を見ると、3階は完全に屋根の中にはまり込んでしまっています。屋根の中にはまり込んでしまうと真っ暗闇の屋根裏になってしまうので、窓を造らなければいけません、そのまま窓を付けると屋根に穴があいてしまいます。従って屋根に穴をあけておいて、その上に出窓を造って無理矢理に窓を開けました。その窓が北立面図にある入母屋屋根の出窓です。この3階出窓の入母屋屋根を「C」とします。この「C」や東立面図（資料 P6）にある二重目の大きな入母屋破風「A」は、先ほどの豊臣大坂城（資料 P5）と同じところでは、

岡山城と比べると分かりますが、大坂城にもその「C」があったはずでは、この「C」の破風があるかということ、望楼型天守の下の方にある屋根はやたらと大きいので、その中に入っている階は窓がなくなって暗闇になってしまい、そこに大きな出窓を造らせました。だからそこにどうしても「C」という入母屋の破風が付いてしまうのです。さらに岡山城を見ると最上階の入母屋破風「D」があります（資料 P7）。これは入母屋破風のでっぺんで、望楼型天守だと必ず平側に正面に付ける「D」です。もう一つ大坂城には四重目のところに「B」という破風があります。岡山城にも「B」という破風があります。

こうやってみると、豊臣大坂城と岡山城は、A B C Dの4つの入母屋破風が全て完璧に一致していることが分かります。要するに岡山城というのは豊臣大坂城と瓜二つだということになるのです。

次に松江城の天守閣（資料 P8）です。これは今も残っていて、豊臣政権で重要な大名の堀尾吉晴の城です。この天守閣は関ヶ原の後に造られた巨大天守で、桁ゆき12間×梁間10間で、120坪ありますから豊臣五大老の天守閣より大きいです。豊臣の五大老の天守がほしい100坪ですから。さすがに関ヶ原の後になるとインフレしてしまうというのが分かると思います。巨大天守ですからその時の重数が四重5階、地下1階あります。これも大坂城や岡山城と全く同じように「C」の入母屋破風が付いています。望楼型の基部となる「A」も付いています。すなわち松江城のように関ヶ原の後になっても「A」や「C」という破風はちゃんと付く、というのが分かると思います。そのように造らないと天守閣として造形的、もしくは構造的に不可能だからです。

この松江城の断面図（資料 P8）を見ると、下から1階、2階のところが大事です。2階に乗っている梁組は、本体の中心部分と、その外側にある入側が別材になっています。2階の梁というのは真ん中の高いところにかかっている、武者走りという入側となっている外側の少し低い位置に付いています。要するに梁の高さが上下二段構えになっていますが、これは関ヶ原の後、慶長15年よりだいぶ後になってできた新型工法なのです。それに対して関ヶ原前の岡山城（資料 P6）は、梁は端から端までずっと通っていて、松江城のように段違いにはなっていません。ということから考えてみると、甲府城天守閣は松江城よりも

はるかに古くて岡山城と同年代なので、梁の掛け方は岡山城と同じように端から端まで掛けていたことが分かります。

9 自慢できる城

それから考えてみると、今回作成した甲府城の復元図（資料 P9）は、気楽にいい加減に作ったのではなく、実はこのようにしかできないことが分かります。1階平面図では、真ん中に畳敷きの四角い部屋があります。この四角い部屋を真ん中に取り替えて、天守閣の台座の歪みは「入側（武者走り）」の所で吸収してしまうので、中は四角くなります。四角い部屋で大きな部屋が3部屋あります。この大きな部屋が3部屋というのは、岡山城天守閣の平面図（資料なし）にほぼこのくらいの部屋が並んでいます。周りに二間幅入側を取るとというのが大規模天守閣の特徴なので、周り二間幅の入側があつて、真ん中に四角く部屋を造っている。これは100%確実だと思います。

また、1階平面図の左上は少し出っ張っていますが、これは付櫓（つけやぐら）というところです。出っ張った櫓が付いているのは明らかに分かるし、古い時代のものはだいたいそこに付櫓が出ています。乾山城天守閣もそこに付櫓があります。また浜松城もあるので、甲府城でも付櫓が出ているだろうということになります。

立面図を見ると、一重目と二重目を同じ大きさに造るとするのは岡山城も松江城も全部同じです。姫路城も、広島城も同じです。一重目と二重目が同じ大きさとなり、望楼型なのでその上に入母屋破風が付きます。ここまでは誰が復元しても絶対にこのようにしかできません。

平側の長手の方向からの断面図（資料 P9 左下）を見てみます。両側に二間半の入側、真ん中に部屋が並べられます。梁の掛け方は岡山城と同じ端から端まで同じ位置に梁が掛かっています。3階部分を見ると、この部分は望楼型なので入母屋破風の中に入っぼり入ってしまい、屋根部屋になってしまいます。そのために窓が必要なので、ど真ん中に「三階出窓」（資料 P9 左中）があります。これは松江城や岡山城、豊臣大坂城にあった「C」の破風です。この出窓は必ず付きます。それがないと真っ暗闇になるからです。その上に望楼が乗るという形になります。

甲府城の場合は両側が大変に歪んでいたもので、平側の立面図で見ると入母屋破風が両側からねじれて見えます。破風がねじれた例は岡山城天守閣にありますので、これも間違いないと思われます。全体を復元すると必ずこうなってしまうということになります。

ただ問題は、今回は4階建てで私の教え子に図面を描かせてみたのですが、正面の立面図を見ると、全体的に見た感じ、何となく上に乗っている望楼が少し物足りません。ちょっと貧弱です。ということは、これは造形上おかしいので、最終的な結論は、もう1階高さを増やして、四重5階にしなければいけない。ただし四重5階にすると屋根の数は増え

ませんので、松江城と同じように、3階部分はかなり立ちが高くなります。3階を上下二つに割って3階と4階に分けるので、3階部分がもう少し高くなるのです。だから立面図の三重目を、今回の図面よりも、この図の縮尺で高さにして約6mmか7mmくらい、三重目と四重目をそのまま上にスライドする形で上の方をボリュームアップすれば、これで本当の甲府城天守閣になるのではないかというのが結論です。おそらく100%とは言いませんが、95%くらいの確率でこうなっていたと思われま

す。甲府城の天守閣の特色は、まず、天守台がとても古めかしいものであった。細長く、そしてものすごく歪んでいる。日本で関ヶ原の後のもので歪んだものはありませんから、そういった意味で日本にある天守閣の台座としては最も古めかしい形式のものの一つです。4つのうちの3番目に歪んでいると思いますから、日本で残っている天守台の台座の中で、最も古い3つのうちの一つであると言えます。また関ヶ原の前にあった天守閣としては非常に巨大で、豊臣秀吉が造った直轄の城と豊臣五大老の城に次ぐ規模を持っていて、関ヶ原直前としては、日本全国現存6位の大規模なものであったということが言えます。そして四重5階の超巨大天守で、ものすごく立派なものです。

そう考えると、今までは甲府城の価値とか格式について、日本全国で200城くらいある近世城郭のうちの一つで、最下位の200位ではなくて、まあ100位くらいに入っているだろうなと思っていた人もいたかもしれませんが、そんなに低い価値ではありません。少なくとも、関ヶ原以前においては、甲府城の価値というのはやはり全国で第6位のとんでもない大名城であったというのが、今回の私の結論です。

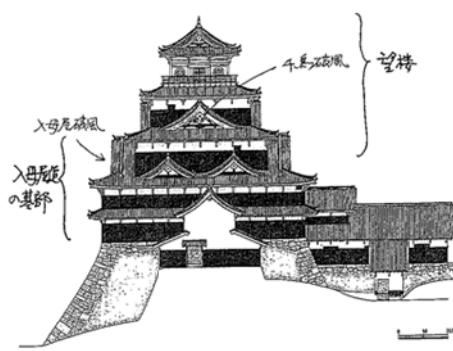
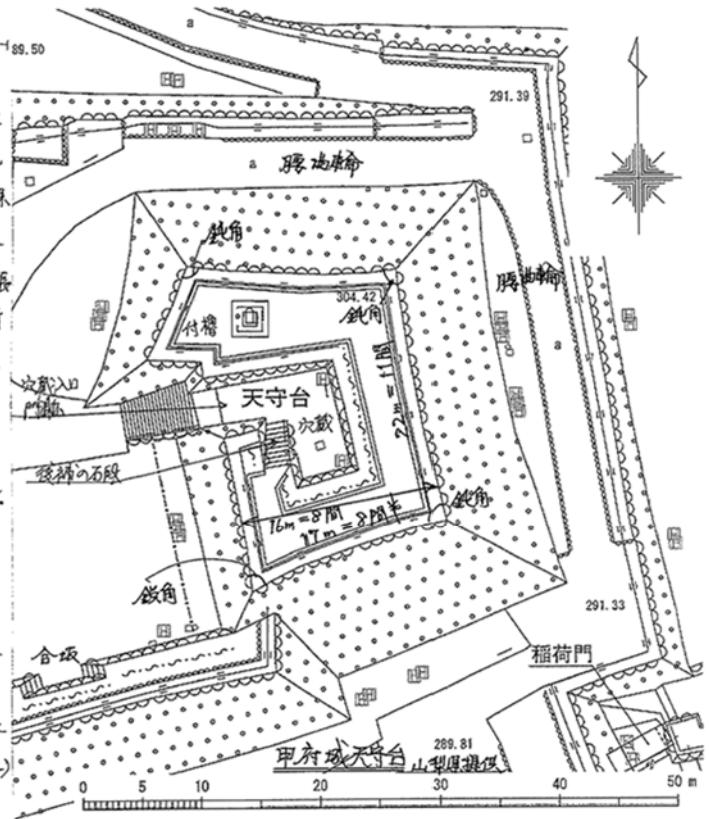
関ヶ原の後、城閣はどんどん発展しましたが、甲府城というのは、その発展の基本となった極めて歴史的にも価値の高い天下の名城です。山梨県民の皆様には、そのことを理解していただいて、これからぜひとも甲府城を自慢に思って、日本全国各地の人々に「すばらしい城である」ということを伝えてほしいと思う次第です。

ご清聴ありがとうございました。



資料

	平	妻	重	階(地階)	城主
豊臣大坂城	12	11	五	七(二)階	豊臣秀吉
岡山城	13	8	五	六	宇喜多秀家
広島城	12	9	五	五	毛利輝元
大和郡山城(築)	8	7	五	五	羽柴秀保
大津城(築)	6	三	四	五	京極高次
●甲府城	11	8	四	五(-)	武野燭燦
浜松城	8	6	三	(-)	堀尾吉晴
岡崎城(改築)	7	7	三	(-)	田中吉政
犬山城(元和改築)	8.5	8	三	四(二)	
松本城(慶小治政)	5	4	三	四	石川数正
宇和島城(海軍前)	6	6	三	三	藤堂高虎
彦根城(旧大津城)	11	7	三	三	井伊直勝
萩城	11.5	9	五	五	毛利輝元
米子城	10	8	四	五	中村忠一
姫路城	13	10	五	六(-)	池田輝政
松江城	12	10	四	五(-)	堀尾吉晴
熊本城	13	11	五	六(-)	加藤清正
高知城(海軍)	7	6	四	六	(山内一豊)



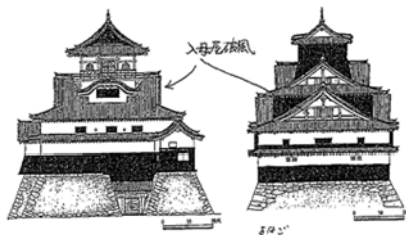
広島城天守 五重五階
—慶長三年(1598) 毛利輝元



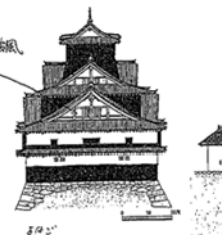
萩城天守 五重五階
—慶長十二年(1602) 毛利秀就



姫路城天守 五重六階-地下一階
—慶長十二年(1602) 池田輝政



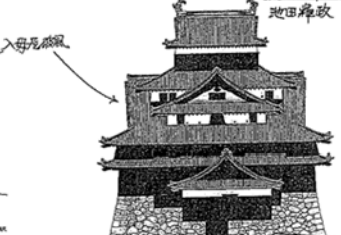
犬山城天守 三重三階-地下一階
—慶長六年(1601)



水戸城天守 四重五階
—慶長六年(1601) 中村忠一



彦根城天守 三重三階
—慶長十一年(1606) 井伊



松江城天守 四重五階-地下一階
—慶長十六年(1611) 堀尾吉晴

望楼型天守